

November 2016

京都大学総合博物館 ニュースレター



錆に覆われた環頭大刀 (本文 pp.2-3, 参照)

穀塚古墳出土環頭大刀に施された象嵌文様.....	2
正始元年重列式神獸鏡の保存処理.....	4
菊名貝塚と常世遺跡の資料.....	5
国際シンポジウム“木質科学と木工芸”ロビー展示について.....	5
第3回APRU大学博物館研究シンポジウム.....	6
大学博物館のコレクションから探る人間・文化・自然の相互作用に 関する国際シンポジウム.....	6
第6回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム.....	7
夏休み学習教室 体験 EXPO2016' 夏.....	8
「昆虫アカデミア」開催報告.....	8
新任教員紹介.....	10
研究資源アーカイブ通信.....	10
総合博物館日誌.....	11

穀塚古墳出土環頭大刀に施された象嵌文様

京都府京都市西京区に所在した穀塚古墳は、金銅製の冠や龍文帯金具など、数々の外来系文物が出土したことで知られており、それらの出土品は、現在、京都大学総合博物館と東京国立博物館が所蔵している。そのうち、京都大学総合博物館所蔵資料の中に、銀象嵌を施した鉄製環頭大刀がある。この大刀が、把頭の環状装飾（外環）内に鳳凰の意匠をあらわした「単鳳環頭大刀」であると判明したのは、1997年の京都大学総合博物館春季企画展『王者の武装—5世紀の金工技術—』のときであった。図録作成に際して森下章司氏（当時文学研究科助手）が実施したX線写真撮影によって、外環内を充填する分厚い錆の中に、鳳凰首を表現した銀象嵌文様の存在が確認されたのである（京都大学総合博物館編 1997）。さらにその後、同博物館で2010年春季特別展『科学技術Xの謎—天文・医療・文化財あらゆるものの姿をあらわすX線にせまる—』が開催された際、株式会社島津製作所の協力を得て大刀のCTスキャン調査が実施された。それにより、両面の象嵌ラインが複雑に写り込んだX線写真からは判別がつかなかった佩裏・佩表の文様を区別することが可能となった。

本稿では、これらの科学的調査の成果を基に作成した実測図を示し、資料の形態的特徴と象嵌文様の詳細を紹介して、その学術的価値について評価を試みる。

形態的特徴と象嵌文様の詳細

現状、刀身部は失われており、環頭部から茎の半ばまでが遺存している。法量は、現存長7.4cm、環の復



図1
X線写真から判読できる
両面の象嵌文様 (S ≡ 2/3)

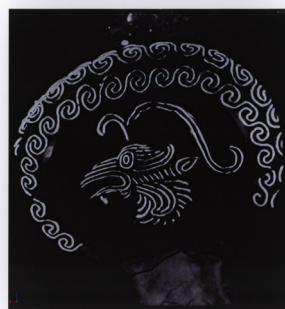


図2
CTスキャンにより抽出された
佩表面の象嵌文様 (S ≡ 2/3)

元長径は5.1cm、短径3.6cm、外環の幅0.8cm、厚さ0.9cm、茎幅2.0cmである。外環は断面D字形を呈し、一部を欠損する。茎部は外環と一体でつくりだされている。錆化により数層に剥離しているため、厚さは不明である。X線写真を確認しても、茎部に目釘孔などは確認できない。全体が厚い錆に覆われているため（表紙写真）、肉眼観察では中心飾の形状や象嵌文様の大部分をうかがうことはできないが、佩表面の外環背側および佩表面の外環腹側に、連続波頭文を表現した銀象嵌を視認できる部位が一部みられる。肉眼で確認できる部位を観察すると、象嵌を施した溝がギザギザとした輪郭を呈していることがわかる。これは、銀線を嵌め込むための溝を、打ち込みたがねを用いたなめくり打ち（鈴木 2013）によって成形したことによるものとみられる。このような「なめくり象嵌」の技術は、5世紀代の朝鮮半島出土象嵌遺物において一般的に認められる。

X線写真およびCTスキャン画像を観察すると、外環の内部に象嵌で鳳凰を表現した中心飾があることがわかる（図1・2）。鳳凰首の輪郭は不明瞭であるが、象嵌が施された範囲がおおよそその輪郭と判断される。2条の銀象嵌で表現された角は、頭頂部から生じてY字状に前後に伸び、後頭部側は長く垂れ下がって端部をやや巻き上げる。目は二重円文で表現され、目の後ろのやや立ち上がる数本のラインは眉の一部とみられる。嘴は少し開く。明瞭に表現された耳を有し、頸毛の周囲には羽毛とみられる表現が施される。象嵌表現には、鳳凰首の右側面と左側面とで明確な差異があり、眉や嘴を表現する象嵌線の条数の多寡や、頸毛表現の

明瞭さにおいて左側面の方が明らかに精緻である。このことは、左側面が佩表側であること、すなわち左腰に佩用した際に体の外側に位置し、より目立つ側になることと関係していると推測される。

外環には4条の連続波頭文を巡らせる。外環の一部が欠損しているため、連続波頭文が端から端まで完存しているのは、佩表面内側の1条のみである。完存する1条をみると波頭は20個あり、おそらく残りの3条も20個の波頭を表現してあったものと考えられる。波頭

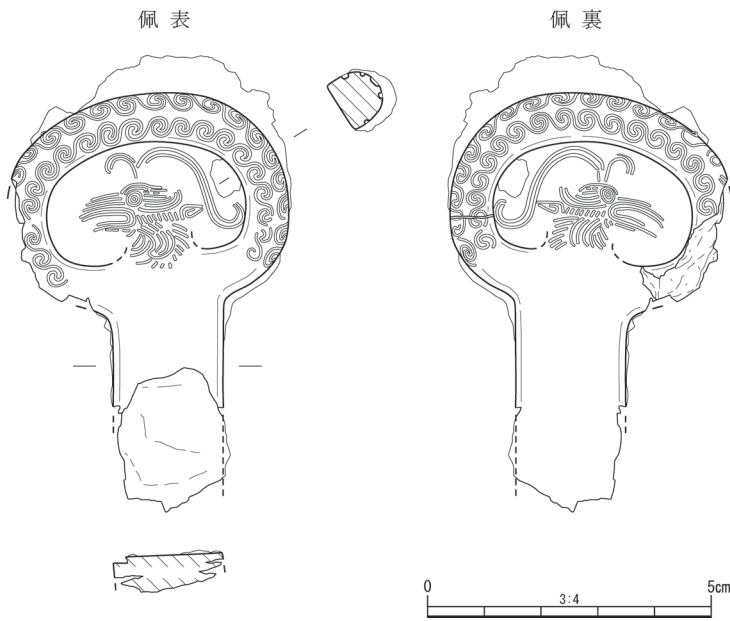


図3 穀塚古墳出土単鳳環頭大刀実測図

文は、佩表側・佩裏側から俯瞰でそれぞれ見える2条の波が向かい合わせとなるよう配置されている(図4)。

穀塚古墳出土大刀の系譜

象嵌装飾を施した環頭大刀の出土例は、朝鮮半島、特に百済や大加耶に該当する地域に多く認められる。ただし、穀塚古墳のような鉄製単鳳環頭大刀の類例はさほど多くない。特筆すべきは、穀塚古墳例にみられる象嵌の細部表現が、国内外の類例と比して最も精細といえる点であろう。

鉄製単鳳環頭大刀の半島出土例は、早い時期のものとして、5世紀中頃までに製作されたとみられる天安龍院里12号石槨墓例や高霊池山洞32NE-1号墳例があるが、これらはいずれも鳳凰が三つの冠毛をもち、角が後方に伸びる。穀塚古墳のようなT字形の角を有する例は、やや時期が下って5世紀後葉以降にみられ、鉄製のもので確実な例は陝川玉田M4号墳例だけである。ただし、玉田M4号墳例は、中心飾が外環と別づくりになっており、一体づくりの穀塚古墳例とは差異が認められる。

日本列島での出土例に目を向けると、熊本県江田船山古墳例や大阪府一須賀D-12号墳例など、象嵌を施した鉄製龍鳳文環頭大刀の類例は数例知られているも

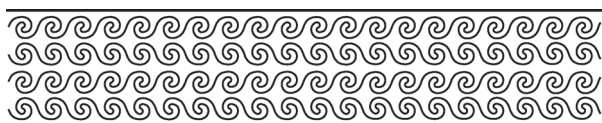


図4 外環連続波頭文の展開模式図

の、中心飾の詳細が明らかなものは山形県大之越古墳例に限られる。大之越古墳例は、T字形の角をもち外環と中心飾が一体で製作されている点で、穀塚古墳例と最も近い特徴を有する。同時期における列島内での象嵌大刀出土例の少なさに鑑みて、穀塚古墳例は朝鮮半島からの搬入品とみていいだろう。T字形の冠毛という特徴に着目すると、大加耶の龍鳳文環頭大刀の中心飾における普遍的な意匠であることから、大加耶との関連がうかがわれる。しかし一方で、特徴的に最も近い大之越古墳例において、外環および中心飾に百済の技術的特徴とみられる金板の圧着技法(金字大2013)が認められることから、百済との関係性も垣間見える。外環の連続波頭文に注目してみても、天安花城里A-1号墳例や陝川玉田70号墳例など、やはり朝鮮半島の百済ないし大加耶の両地域で類例が確認されている。現時点の資料状況では、穀塚古墳例の製作地を百済と大加耶のいずれかに断定することは難しい。

おわりに

穀塚古墳出土環頭大刀の象嵌文様を図化、提示し、国内外の類例からその技術系譜について若干の評価を試みた。穀塚古墳例の象嵌文様は、朝鮮半島での出土例を含めても細部表現が最も精緻であり、同大刀は古墳時代中期における列島社会の対外関係について考える上で極めて重要な資料である。今後、同大刀が学術資料としてより活用されることを期待したい。

本稿をなすにあたり、実見調査や資料提供などで阪口英毅氏(京都大学大学院文学研究科)に全面的なご協力を賜った。心より感謝申し上げます。

主要参考文献

- 金字大2013「百済・加耶における装飾付大刀の製作技法と系譜」『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所 pp.54-77
- 京都大学総合博物館1997『王者の武装—5世紀の金工技術—』
- 鈴木勉2013「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その2 透彫り金銅の技術となめくり象嵌の技術」『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所 pp.142-144

(文学研究科・白眉センター 特定助教 金字大)

正始元年重列式神獸鏡の保存処理

平成27年度保存処理を行った資料のうち、兵庫県豊岡市森尾市尾・森尾古墳出土品である正始元年重列式神獸鏡《考古学資料目録2 兵庫県006 登録番号5661》について述べたい。

正始元年重列式神獸鏡は、数少ない古墳出土の紀年銘鏡のひとつであり、研究者だけでなく、考古学ファンにとっても人気が高く、極めて重要な資料である。(たとえば、他の正始元年銘鏡に、重要文化財に指定されている三角縁神獸鏡(群馬県高崎市・蟹沢古墳出土 東京国立博物館)がある。)

今回の保存処理については、研究調査のための学術資料として、また、博物館において展示貸し出しの潜在的需要が高い資料として、それぞれの視点の活用を踏まえた修理方針について、修理前、そして修理過程において、関係者間で幾度かの協議を行った。

実はこの鏡、発掘後今日に至るまでの間に、あまり前例のない不思議な修理履歴を経ている事が分かった。複数の鏡の破断を接合するために、別の鏡(便宜上、和鏡と称す)を背面に用いて、その和鏡と破断した本来の鏡を真鍮蠟でハンダ付けしているのである(なお、一部の破断の接合箇所では、文様の天地が逆となっている)。さらに、その和鏡と本来の鏡の段差は、茶色の粘土様の物質(分析は行ったが、材質の詳細は不明)で埋められている。しかしながら、和鏡の取り外しは、



写真1 修復途中の鏡



写真2 修復後の鏡(撮影・寿福滋)

物理的な振動や加熱などの手段を講じる必要があり、本来の鏡を損ねる可能性が高く、現状の修理方針として採ることはできない。

ここで、研究者にとっては、和鏡と本来の鏡との段差や色味の違いは、鏡本来の厚みや破断の形状を理解する上で好ましいものであるが、その一方で、一般向けの展示を考慮すると、和鏡の露出は不要であり、目立たぬ様に補彩するなど、本来の鏡の姿を明瞭にすることが望まれる。そこで、樹脂による厚み補正を行わず、和鏡と本来の鏡の小さな空隙には透明のアクリル系樹脂(B72)を充填し、その後、強化剤を含浸して、和鏡が目立ちすぎない様に補彩するという方針をとった。

この保存修理にかかる議論は、博物館における学術資料を保存管理・活用する哲学を再認識し、共有する機会ともなった。保存修理の各段階において、総合博物館教員はじめ京都大学大学院文学研究科考古学研究室の吉井秀夫教授ならびに阪口英毅助教、京都大学人文科学研究所の岡村秀典教授のご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお、平成27年度は、正始元年重列式神獸鏡のほか、森尾古墳出土金属製品、漆製品、エジプト考古資料であるトキミイラおよび石灰岩製柱頭についても保存修理を行った。

(総合博物館 博物館研究員 横山操)

菊名貝塚と常世遺跡の資料

2015年12月、京都大学人文科学研究所所長を務められた桑山正進先生（本学名誉教授）より、神奈川県横浜市菊名貝塚と福島県喜多方市常世遺跡で出土した考古資料（縄文土器、石器、骨角器、貝類など自然遺物）をご寄贈いただいた。両遺跡の資料は、先生のご父君にあたる桑山龍進先生（1909-1987）が発掘されたもので、2001年より総合博物館に寄託されていた。菊



名貝塚の資料については、桑山龍進先生ご自身が発掘調査報告書を刊行されたが（桑山1980）、常世遺跡については、ご遺志を継がれた桑山正進先生と常世遺跡資料刊行会によって、調査と出土資料の全貌が明らかになった（岩田編2009）。

今回の寄贈をうけて、菊名貝塚の縄文土器（写真）と貝類については、総合博物館平成27年度特別展「京のイルカと学びのドラマ」において展示した。今後も総合博物館では両遺跡の資料の活用を進めていきたいと考えている。

《参考文献》

桑山龍進 1980『菊名貝塚の研究』、菊名貝塚研究会
岩田貴之編 2009『常世遺跡資料 1940・1958年における桑山龍進の調査』、常世遺跡資料刊行会・桑山正進

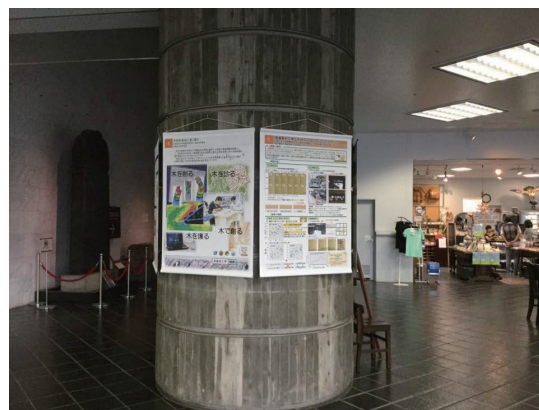
（総合博物館 准教授 村上由美子）

国際シンポジウム“木質科学と木工芸”ロビー展示について

9月21日（水）～23日（金）

2016年9月20日から23日、京都大学において国際シンポジウム Wood Science and Craftsmanship 2016（通称・WSC2016）が開催された（実行委員長：京都大学農学研究科森林科学専攻・藤井義久教授）。第1回の2014年フランス・モンペリエ大学での開催に続く、第2回目となる今回は、各国の研究者らによる研究報告会、日本の木工職人による展示・実演、一般公開講演会、京都近郊の伝統木工芸の工房や文化財修理現場、さらには漆や北山杉などに関する見学会を通じ、木質科学に従事する大学・研究機関の研究者そして様々な伝統木工芸に従事する日本とフランスそれぞれの職人らが交流した。

この国際シンポジウムにちなみ、総合博物館は共催機関として、木質科学と木工芸に関するポスター展示を一階ロビーにて開催した。ポスターでは、京都大学農学研究科森林科学専攻（林産加工学分野、生物材料設計学分野）の最新の研究成果を、楽器響板の柀目や



内装材の手触りなど、身近で興味深い話題として取り上げ紹介を行った。

これらの営みを契機として、伝統工芸における具体の智と、科学における抽象の知について、両者の見識を総合し、さらに深めてゆきたいと考えている。

（総合博物館 博物館研究員 横山操）

第3回 APRU 大学博物館研究シンポジウム

10月5日（水）～7日（金）



2016年10月5日から7日にかけて、香港大学において環太平洋大学協会 大学博物館シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは、2012年9月に京都大学総合博物館で初めて開催され、2014年5月に国立台湾大学での第2回をへて、今回3回目の開催となったものです。今回のテーマは“Museum Teaching beyond the Faculties”であり、大学博物館で、伝統的な学部の制度や環境による制約を超えた教育がどのように目指され、実践されているかについて話し合わ

ました。

シンポジウムは、香港大学学長の Peter Mathieson 教授による開会の辞によりはじまりました。環太平洋地域にある様々な大学博物館から60を超える参加者が集まり、2つの基調講演と10の発表が行われ、様々な実践が紹介され、熱い議論がかわされました。また、発表の合間には、香港大学美術博物館、同地質学博物館および同饒宗頤學術館の見学会が行われ、好評を博しました。なお、京都大学総合博物館からは、岩崎奈緒子館長と網島が参加し、それぞれ京都大学ミュージアム連携や当館における子ども博物館の実践例と、それらがもつ博物館教育としての意義について報告いたしました。

今回のシンポジウムに参加し、大学博物館は、大学の中であって、多様な学部に属する学生が集う異種混浴の場になっていることを再確認いたしました。これを契機に、大学博物館がもつ特性をよりいかした学生教育の実践を模索していきたいと思ひます。

（総合博物館 特定助教 網島聖）

大学博物館のコレクションから探る人間・文化・自然の相互作用に関する国際シンポジウム

10月11日（火）～12日（水）

2016年10月11日から12日にかけて、京都大学「知の越境」融合チーム研究プログラム（SPIRITS）による国際シンポジウムがベトナム国家大学ハノイ校（VNU）で開催されました。これは京都大学総合博物館、VNU 自然科学大学、および VNU 人文社会科学大学の共催によるもので、VNU 自然科学大学の創立60周年記念の関連行事であるとともに、京都大学総合博物館（1997年創館）の20周年に向けたイベントという位置づけで企画されました。



11日のシンポジウムには、日本、ベトナム、中国、韓国、およびタイから19人の研究者が招かれ、文化史、自然史、技術史、アーカイブなど多様な観点からシンポジウムの標題に関して話題提供がなされました（京都大学からは7人が参加）。また、ベトナムの博物館関係者やVNUの学生を中心に多くの来場者があり、大学博物館が取り組む課題や可能性について、活発な議論が交わされました。

翌日にはハノイにあるベトナム民俗学博物館、VNU

人文社会科学大学人類学博物館、ベトナム国立自然博物館などの見学が行われ、ベトナムにおける博物館の現状視察や研究者との意見交換がなされました。

2日間というタイトな日程でしたが、各国の大学博物館に所属する若手研究者の交流が促進されるとともに、大学博物館コレクションの可能性を国際的に議論できる有意義なシンポジウムになりました。

(総合博物館 研究員 中山直英)

第6回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム

10月24日（月）～28日（金）



2016年10月24～28日に日本学術振興会研究拠点形成事業 第6回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム（The 6th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity）がインドネシアのボゴールにて開催されました。このシンポジウムではアジア9カ国から110名の研究者や学生が参加し、研究発表や意見交換が活発に行われました。

24～25日はインドネシア科学院を会場として研究発表が行われました。アジアの脊椎動物を対象とした約90題の研究結果が紹介され、その学問分野は分類・行動・生態・保全など多岐にわたりました。また、24

日の夕方にはボゴール動物学博物館（MZB）の収蔵庫を訪問し、シーラカンスをはじめとする貴重な標本群を見学することができました。

26～28日にはエクスカッションが催され、チボダス植物園やゲデ・パンランゴ国立公園、ボゴール植物園を訪問しました。このうちチボダス植物園では簡単な採集活動を行うナイトウォークが催され、クーリーモリドラゴンをはじめとした

インドネシアの野生動物を観察できました。

今回のシンポジウムでは研究発表の他にエクスカッションが充実しており、国際色豊かな参加者たちが時間を共有する機会に恵まれていました。こうした時間は研究に関する議論や情報交換を活発にただけでなく、参加者同士の親交を深めることにつながったのではないかと思います。本シンポジウムを通して研究者間の国際的なネットワークが拡大し、今後の脊椎動物研究がさらに発展することが期待されます。

(京都大学理学研究科 M2 牧野智久)

夏休み学習教室 体験 EXPO2016' 夏

8月3日(水)～5日(金)



を行ったり、生け花を通じて表現について学んだり、さらに講師と関連する内容について質疑応答することで、参加者は自らの好奇心に従って積極的に学ぶことができます。16度目の開催となった本年は、上記3日間の会期中、7種のプログラムに144名の方が参加されました。

ところで、例年「夏休み学習教室」の運営には学芸員養成課程「博物館実習・館園実務」を受講

2016年8月3日(水)～5日(金)の3日間、恒例の「夏休み学習教室」を開催しました。「夏休み学習教室」は、毎年8月初旬に当館で小学校低学年の児童から中学生の生徒を対象に行われるアクティブラーニング型のプログラムです。その内容は、科学技術から自然科学、文化に至るまで多岐にわたり、大学教員を主とする講師の指導により、参加者が五感を用いて大学での学びを体験できるものとなっています。貴重な標本に実際に触ったり、最新の技術を駆使した図工

する学生が参加しています。本年は、学内の受講生が9名、学外からの受講生5名が参加し、会場設営、受付業務と参加者の誘導、そしてプログラム進行の補助などを行ってくれました。今年度、「夏休み学習教室」の運営に参加された学生の皆さんが、将来、この体験を博物館の運営に活かしてくださることを願います。

(総合博物館 特定助教 網島聖)

2016年企画展関連企画

「昆虫アカデミア」開催報告

7月23日(土)～10月23日(日)

総合博物館では、2016年企画展「虫を知りつくす—京都大学の挑戦—」(7月13日～10月30日)の関連企画として、特別講演会シリーズ「昆虫アカデミア」を開催しました。

この企画展では、「虫好き子供が大人になったら…」を一つの切り口として、京都大学の昆虫研究者が力を

合わせ、昆虫学の最前線を紹介することをめざしました。しかしながら、展示だけでは紹介しきれない事や、難解になりがちな事も多々あります。特に夏休み期間には当館にも多くの子供が来館しますが、最前線の成果を子供でも楽しめ、理解できるように展示するのは困難です。そこで、企画展開催期間中の土日に、可能

な限り本企画展示の企画に直接関わっていただいた先生方の講演会を開催することで、そうした展示だけでは伝えきれない部分を補いたいと考えました。

また、当館では、これまでから、毎週土曜日に「子ども博物館」という子供向けの解説イベントを実施してきました。本年度は「昆虫アカデミア」の講演会を実施する土曜日には、子ども博物館の解説スタッフに当日「昆虫アカデミア」で講演していただく先生の研究室の学生に参加してもらおうという試みを実施しました。この試みは、小学生の子供達を今回の企画展に引き付けるのにかなり有効であったようで、毎土曜日ごとに繰り返し来ている小学生が複数見られました。

本ニュースレター 11 ページからの総合博物館日誌にありますように、「昆虫アカデミア」は 13 回の講演会で構成しました。初回（7月23日）と最終回（10月23日）は、本企画展企画実行委員会委員長の松浦教授にお願いし、第7回（8月21日）は二人の演者に、他の回は各1回をお一人ずつにお願いしました。都合総勢 13 人の先生方の協力を得て実現するに至ったわけです。これほど多くの演者による講演会シリーズを一つの企画展の関連企画として実施するのは当館としては稀な試みですが、昆虫の多様性と、それを研究する研究者の多面性を一般の方々に知っていただける良い機会になったかと思えます。

初回から第5回（8月7日）までは、それぞれ、シロアリ、ゾウムシ、セミ、ショウジョウバエ、サバクトビバッタを材料に研究されている先生に、ご自身の研究紹介を中心に講演していただきました。夏休み前半であったこともあって、多くの子供の参加が見られました。質疑応答に際して、参加していた子供から「僕はオトシブミ（ゾウムシの仲間）を飼ってる」とか「セミを飼っていると、すぐに死んじゃうんだけど」といった発言も聞かれました。現役の虫好き子供が、かつての虫好き子供である現役の研究者と直接に自分が興味ある分類群を通してふれあえる機会となり、うれしく思います。一方で、いずれの講演も最新の研究成果を踏まえたものであり、中には未公開情報まで含む講演もあり、大学の講演会としての新規性を求めてこられた方にも、満足していただけたでしょう。

第6回（8月20日）は間接相互作用網、7回（8月21日）はロボティクス、8、9回（9月3日、17日）

は化学生態学、10回（10月8日）は共進化と共生を、11回（10月9日）は熱帯生態学をテーマに講演していただきました。これらの回では、「経済ってなんですか？」や「遺伝ってなあに？」といった基本的語句に関する質問が出たり、逆に最先端の議論にまで質疑が発展したりで、演者の先生方には大変だったかと思いますが、多くの一般の方々に専門分野の概念にふれていただく機会を持つ事ができました。

今回の講演会シリーズ中で第7回だけ二人の先生にお願いしたのですが、機械工学と昆虫学の共同研究という異色の共同研究を実施したお二人に最新のロボティクスの概念を語っていただいたことで、ロボットと昆虫に対する理解が深まったのではないかと思います。講演室に持ち込んでいただいたアリが操縦するロボットの実演のために生きたアリを参加していた子供が採ってくる場面もあり、ここでも現役虫好き子供と研究者の交流が実現できました。

第12回（10月22日）はハナホソガによる受粉の進化についてでした。この回は他回に比べると子供が少なく、学生が多かったかと思えます。昆虫が1種だけで、ただ1種の植物の受粉を行うように進化するというかなり特殊な系に関する話題であったためかと思えます。参加者総数も他回に比べると少なかつたものの、参加者にとっては大変内容の濃い有意義な学術講演になった事でしょう。

最終回は、初回と同じテーマで話していただいたのですが、こちらの想定をはるかに超える参加希望者が集まりました。この回では、あまりに多くの人が集まったため、会場内に博物館スタッフが入りづらくなり、映写機器のトラブル対応等が遅れてご迷惑をおかけしてしまいました。参加者は先着 100 名としていたものの、実際の入場制限の手順を充分には定めていなかった事で混乱したのは、今回の反省点です。

最終回に若干混乱したものの、最終回にこのように多くの人に集まっていただけなのは、総じてこの講演会シリーズが広く一般の人に受け入れられた成功の証かと思えます。複数回に参加していただいた来館者も大勢いました。最後に、この場をかり、「昆虫アカデミア」に参加していただいた来館者の皆様と、興味深い講演を提供していただいた先生方に御礼申し上げます。

（2016 企画展事務局・総合博物館 助教 角谷岳彦）

新任教員紹介

白勢 洋平 助教・資料開発系 2016年10月1日着任



10月に助教として着任しました白勢洋平と申します。総合博物館では自然史、特に鉱物や化石などを含めた地球科学全般を担当させていただきます。

私の専門は「鉱物学」で、天然に産する鉱物を分析、記載することにより、地球がどのように発展してきたのかを探っています。地球を構成する「岩石」はたくさんの「鉱物」の集合からできています。水晶やダイヤモンドなど鉱物はときに宝石として、ときに材料、資源として社会でも様々なかたちで活躍をしています。そんな鉱物にも生まれた場所、育った環境があり、まさに現在生まれゆくものもあれば、数十億年の長い歴史を持つものもあります。今日の前にある鉱物を調べるといことは、長い地球の歴史に耳を傾けるということでもあるのです。私自身は子供の頃には気が付くと石を拾ってきて、これは何だろう、図鑑や博物館の石はきれいだなあと考えていました。きっと身近なところに学問の入り口や興味関心というものは転がっているもので、そういった想いを拾い上げていただき、いつまでも大切にさせていただけたらと思います。

総合博物館には、今まであまり知られておりませんが、20世紀初期の日本の3大鉱物コレクションである「和田標本」「若林標本」「高標本」に勝るとも劣らない数万点もの鉱物標本が秘蔵されていました。これらの標本の収集には京都帝国大学採鉱冶金学教室の比企正が深く関わっています。現在、この「比企標本」と「三校標本」の整理、データベース化が行われており、整理が進むほどに当時の国内鉱山の鉱石の充実さなどが際立ってきます。また、総合博物館の収蔵庫には、新種の記載などに用いられた貴重な化石のタイプ標本も数多く収蔵されています。これらの偉大な標本を世に発信していく、また、後世へと継承できるかたちにすることが私の責務です。同時に、研究対象としての価値が非常に高いこれらの標本の存在を研究者たちに知っていただき、最先端の研究に利用していただくことが総合博物館としての重要な役割だと考えております。

今後は、私自身野外調査により試料を収集するとともに、総合博物館の標本を調査することで新たな研究成果を発信していきたいと思っております。京都大学という、設備や人材に恵まれた環境で研究を行えることは大きなメリットであると考えております。また、国内外の博物館同士で連携を取って相互に標本を管理し、研究にも利用できるような体制を構築していくことで、学問のさらなる発展が期待できると考えます。

最先端研究と基礎学問を「繋ぐ」役割。研究活動と世の中を「繋ぐ」役割。総合博物館が果たす多角的な役割はいずれにせよ「繋ぐ」ことだと感じます。私も展示や研究を通して未来へと学問を繋いでいきたいと思っております。

研究資源アーカイブ通信

【平成27年度】

2015年9月

10日、映像ステーションにてアカデミックデイ2015事前説明会。

25日、研究資源化公募の調査依頼受付締切、依頼・調査対応7件。



2015年10月

7日～11月8日、特別展「研究を伝えるデザイン：研究者の思いをかたちにする工夫とこだわり」への協力（オンライン公開の「展示コンテンツ」のうち「1956-1976 宮本正太郎の火星スケッチ」のスタンダードアロン端末提供等）。



15日～24日、映像ステーションにて京都大学東南アジア研究所「Visual Documentary Project：東南アジアの今をみつめる」特別上映。

30日、研究資源化公募の研究資源化申請書（研究

資源化プロジェクト提案）締切，応募3件。

2015年11月

18日、映像ステーションにて現代ミャンマー映画「The Monk」上映会。

川村多實二資料デジタルコレクション（京都大学デジタルアーカイブシステム Peek 登録）の調査時撮影画像を公開（著作権保護期間切れによる）。

2015年12月

3日、平成27年度京都大学図書館機構講演会「デジタル化資料の公開にかかわる権利処理を学ぶ：基礎知識から実践まで」への協力，事例報告「京都大学研究資源アーカイブにおける著作権処理の事例」提供。

2016年2月

10日、映像ステーションにて第3回研究資源アーカイブ研究会「さようなら映像ステーション，こんにちは映像ステーション：稲盛財団記念館から総合博物館へ」開催。

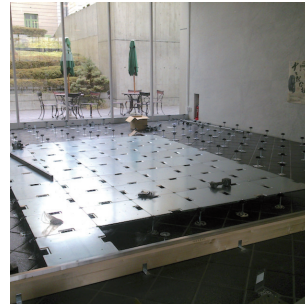


18日～月内，北部作業室で保管していた医学研究科総合解剖センター資料を医学研究科へ返却（搬出）。

27日，映像ステーションを一時閉館（京都大学稲盛財団記念館での営業終了）。

2016年3月

7日～16日，総合博物館1階ロビーに映像ステーション用OAフロア設置，稲盛財団記念館1階映像ステーションより設備・物品移動。



11日，研究資源アーカイブ運営委員会専門委員会開催（研究資源化対象検討）。

31日，研究資源アーカイブ運営委員会開催（次年度事業検討，研究資源化プロジェクト3件新規採択）。

【平成28年度】

2016年4月

齋藤特定助教赴任。

京都大学デジタルアーカイブシステム Peek パブリックモードインターフェース更新。



（総合博物館 講師 五島敏芳）

総合博物館日誌（平成28年7月～平成28年10月）

展示

7月13日（水）～10月30日（日）平成28年度企画展「虫を知りつくす ー京都大学の挑戦ー」

関連企画 特別講演会シリーズ「昆虫アカデミア」

7月23日（土）「虫たちの社会：シロアリ王国の冒険」松浦健二（京都大学大学院農学研究科 教授）

7月24日（日）「長～いゾウムシの「鼻」はどうして進化したの？」東樹宏和（京都大学大学院人間・環境学研究科 助教）

7月30日（土）「クマゼミはなぜこんなに多いのか」沼田英治（京都大学大学院理学研究科 教授）

- 8月6日(土)「模様はどのようにしてつくられるのか:ミズタマシヨウジヨウバエを例に」越川滋行(京都大学白眉センター 特定助教)
- 8月7日(日)「砂漠で生きる昆虫」前野浩太郎(国際農林水産業研究センター 研究員)
- 8月20日(土)「生き物の多様性を生み出す虫と植物のネットワーク」大串隆之(京大大学生態学研究センター 教授)
- 8月21日(日)「ロボティクス × 社会性昆虫学」土畑重人(京都大学大学院農学研究科 助教) / 藤澤隆介(八戸工業大学 講師)
- 9月3日(土)「植物のかおりの生態学」高林純示(京大大学生態学研究センター 教授)
- 9月17日(土)「昆虫研究におけるケミストリー」森直樹(京都大学大学院農学研究科 教授)
- 10月8日(土)「花と昆虫の共進化」加藤真(京都大学大学院人間・環境学研究科 教授)
- 10月9日(日)「熱帯雨林の昆虫調査」市岡孝朗(京都大学大学院人間・環境学研究科 教授)
- 10月22日(土)「受粉することを「覚えた」蛾-ハナホソガ」川北篤(京大大学生態学研究センター 准教授)
- 10月23日(日)「虫たちの社会:シロアリ王国の冒険」松浦健二(京都大学大学院農学研究科 教授)

ロビー展示

9月21日(水)～9月23日(金) 木質科学と木工芸(第2回国際シンポジウム木質科学と木工芸2016 WSC2016)

他会場での展示

8月25日(木)～9月18日(日) 京都・大学ミュージアム連携合同展 大学は宝箱 考古もいっぱい!

イベント

- 8月3日(水)～8月5日(金) 夏休み学習教室 体験 EXPO2016' 夏
- 8月3日(水) No.1 未来の図工室-コップがしゃべり、しゃもじが歌いだす! 塩瀬隆之(総合博物館 准教授)
- 8月3日(水) No.2 命をいけよう-大作いけばなに挑戦- 笹岡隆甫(華道「未生流笹岡」家元)
- 8月3日(水) No.3 望遠鏡を作って星や月を観察しよう+大人のための学習教室 川上紳一(岐阜聖徳学園大学 教授)・大野昭文(三重県立博物館 館長)
- 8月4日(木) No.4 海のモンスター「深海魚」のふしぎ 中山直英(総合博物館 研究員)
- 8月4日(木) No.5 元素博士ジュニアになろう!～えれめんランプをしながら元素を知ろう～ 桜井弘(京都薬科大学 名誉教授・元素周期表同好会)
- 8月5日(金) No.6 昆虫の社会と不思議-アリとシロアリを比べてみよう- 土畑重人(京都大学大学院農学研究科 助教)
- 8月5日(金) No.7 トカゲとヘビはどこがちがう? 疋田務(京都大学 名誉教授)
- 8月9日(火)～10日(水) 京都大学オープンキャンパス 知はもっとダイナミックで刺激的だ
- 8月25日(木)～12月3日(土) 京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー
- 8月28日(日)～9月2日(月) WAC-8 Kyoto 2016
- 10月5日(水)～7日(金) 第3回 APRU 大学博物館研究シンポジウム(3rd APRU University Museums Research Symposium 2016)
- 10月16日(日) 京都千年天文学街道・第26回アストロトーク
講演「晩秋の夜空を飾る流星群 ～オリオン おうし しし ふたご～」
4次元シアター「3Dメガネでみる宇宙のすがた ～流れ星と彗星や小惑星とのかかわり～」
- 10月29日(土) 京都大学ジュニアキャンパス
- 10月30日(日) TED* Kyoto University 2016

レクチャーシリーズ

- 9月10日(土) No.141 「みんなの知らないシロアリの秘密」 松浦健二(京都大学大学院農学研究科 教授)
- 10月8日(土) No.142 「幸福の神経基盤の解明」 佐藤弥(京都大学大学院医学研究科 特定准教授)

総合博物館セミナー

- 7月8日(金) 第78回 A story of personal experience as a museum scientist 于宏燦(総合博物館招へい外国人学者/台湾・国立台湾大学生命科学院 教授)
- 9月9日(金) 第79回 GOOD GIBBONS AND EVIL MACAQUES CULTURAL VIEWS OF CHINESE PRIMATES 张鹏(総合博物館 客員教授/中国・中山大学人類学系 教授)

入館者数

18,087名 (うち特別観覧 72団体 2,849名)

発行日 2016年11月30日
編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>